

エゴン・シーレのマウソレウム計画

金田佳子

エゴン・シーレ（1890－1918）は20世紀初頭のオーストリア表現主義を代表する画家であり、生涯で約3000点もの作品を残した。多くの自画像と裸婦を描き、未成年者誘拐の容疑で逮捕されたスキャンダルでも知られている。また、第一次世界大戦時のスペイン風邪により、28歳の生涯を終えた悲劇の画家としても一般的に知られている。こうした話題性を持つ為か、シーレ作品の愛好者は年々増え続け、彼の生涯をモチーフにした映画なども公開されている。はたしてそれらのイメージは、シーレの実像を映しだしているのだろうか。シーレの芸術作品を見ていくと生と死及び宗教的テーマの重要性が浮かび上がってくる。それは、一般に知られるシーレ理解において、あまり取り上げられない部分である。しかしながら、筆者はシーレ芸術の総合的理解の為にはそうした面への考察が必須であると考え、シーレ理解においてこのようなアプローチは未だなされていなかったといっても過言ではない。

筆者は宗教的要素を強く発揮するマウソレウム（霊廟）計画について検討し、この事案につきシーレが残した文書や作品、スケッチ等に立ち返って研究を進めている。シーレは「マウソレウム」草案として資料を残している。シーレ自筆のメモ書きは特殊な筆記体でなされ、残念ながら現在はウイーンでもごく僅かの人しか解読できない。さらにシーレの筆記体は大変読みづらいものであった。筆者はウイーン留学時に、オーストリア美術研究者兼ドイツ語筆跡鑑定家であるハンスヨルク・クルーク博士の協力を得て、2001年のシーレの筆記体からドイツ語のブロック体へと転記し、マウソレウムの第一資料の明確化を図り、さらにそれらの和訳を2011年に行った。本稿はこれを元にしていかなる内容のマウソレウムとなるのか考案し、その再現を試みるものである。